

正
 月
 公
 博
 物
 室
 一
 月
 部
 二





二月部目録

△印ある俳僧の季と持りの人

○養生の法。雨風の考。米の計。妙茶との外人家。直室のてい。川々よ。粒多あつゆへ。同録ふりしるさじ。

二月

卦 月支 調子 陰陽生 異名

初二

△敬顰節

○七十二候 占候

初二

△春分中

○七十二候 天候占候

初二

△日令

二月日の定りたること干支のまじりたることと爰ふあつむ

△中和節

酒

△献生子

△上春服

△吉野餅配

△南二月堂行

△秋奠

△初午

△水間祭

△東福寺賦法

△戸耶奈

△初午諸祭

△南都春日祭

△迎木妙寺詣

△大原の祭



二月目錄

△幡初卯	△園韓神祭
踏青節	迎富
賜尺	蚕農市
萬神都會	△出代
△行基祭	△二日灸
△祈年祭	△新能
△岩宮能	
祇園八講	△遺教經會
泉涌寺金剛開臨	△貴松五穀祭
△列見	△百花朝
△三月堂水取	△花朝節
△涅槃會	△二月の別
△佛の別	△さり佛
△嵯峨柱炬	△天寺常樂會
△真福寺常樂會	△彦山祭

日八廿 日五廿 日三廿 日廿 日九廿

△餅花煎	△積塔
△貝寄	△觀音誕辰
△浅間祭	△並賢菩薩
△天寺聖靈會	△比良八講
△天神御忌日	△菜種御供
△天和の節	△道明寺祭
二月令	此部小日の定より二月一ヶ月のあつたつたあつた
△彼岸	△彼岸迎僧状
△天王寺祭	△天王寺踊念佛
△時宗踊念佛	△社日
△男女嫁娶	△紙鷲
△得子	△初雷
△鶴鳥の圖	△候霜
△水口祭	△田畑野山焼
	△季御讀終

二月目録

此部は二月一ヶ月までの

△苗代	△同業	△種浸	△種蒔	△藍麻	△蒲公	△狗脊	△五加木	△韭	△水葱	△菜の花	△雙草	△草芳	△荻の焼原	△角組	△若紫
世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三
△種浸	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔	△種蒔
世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三

△銀杏花	△紅梅	△紅梅盛文	△八重梅	△座論梅	△越中梅	△初梅	△初花	△待花	△糸櫻	△姥様	△見様	△一重様	△彼岸様	△熊谷様	△種植	△接穂	△茄子	△西瓜	△やいば	△修樹	△月生類	△果鳥	
世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三
△紅梅	△紅梅	△八重梅	△八重梅	△越中梅	△越中梅	△初花	△初花	△糸櫻	△糸櫻	△見様	△見様	△彼岸様	△彼岸様	△熊谷様	△種植	△茄子	△茄子	△西瓜	△やいば	△修樹	△月生類	△果鳥	
世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三	世三

此部は二月一ヶ月の

生人

△同類	△引鶴	△孕雀	△孕鹿	△蜂	△蝶	△蟾蜍	△蛙子	△燕鯨	△塔	△もろこ
テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ
△歸雁	△鳥巢	△松尾鳥	△鹿角落	△虫	△蛙	△青蛙	△鮎子取	△田螺	△寄居虫	△馬刀
テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ

二月 此部ハ風雨の占ニ破軍の
 他行の心得の作事の時ニあり料理
 せん立の法食物の作りニあり其外
 品々あり其日の定まる事ハ口の日
 今ノ部ニあり此部ハ日ノこと
 二月一ヶ月要用の
 二月目錄終

二月之部

△此部ハ風雨の占ニ破軍の
季ニあり

當月の清風脆月
 舒して仲陽の氣
 整野外に出
 青州と踏天
 氣と專小受
 術則扶陽の
 術を草木の
 日影と受て
 人日影と受て

異名

△仲春 △陽中 △智月 △今月
 △夾鐘 △驚蟄 △春分

△小草生月 △梅見月 △雪消月
 △梅津月 △衣更着

異名註

夾鐘ハ
 夾ハ字甲也而の物あり
 鐘ハ

雅曰二月為如といつる警の藝。
 春分のこけハ二丁目あり

○蔵玉 小草生月 顯昭
 月乃なるむさうのこら

○ 梅は二月 友則

うぐいすのかよぬ里の宿は梅の花をなす梅つこ月

○ 蔵王梅見月 有家

とふんとならぬ梅の梅見月 風のふさけをねまきるも

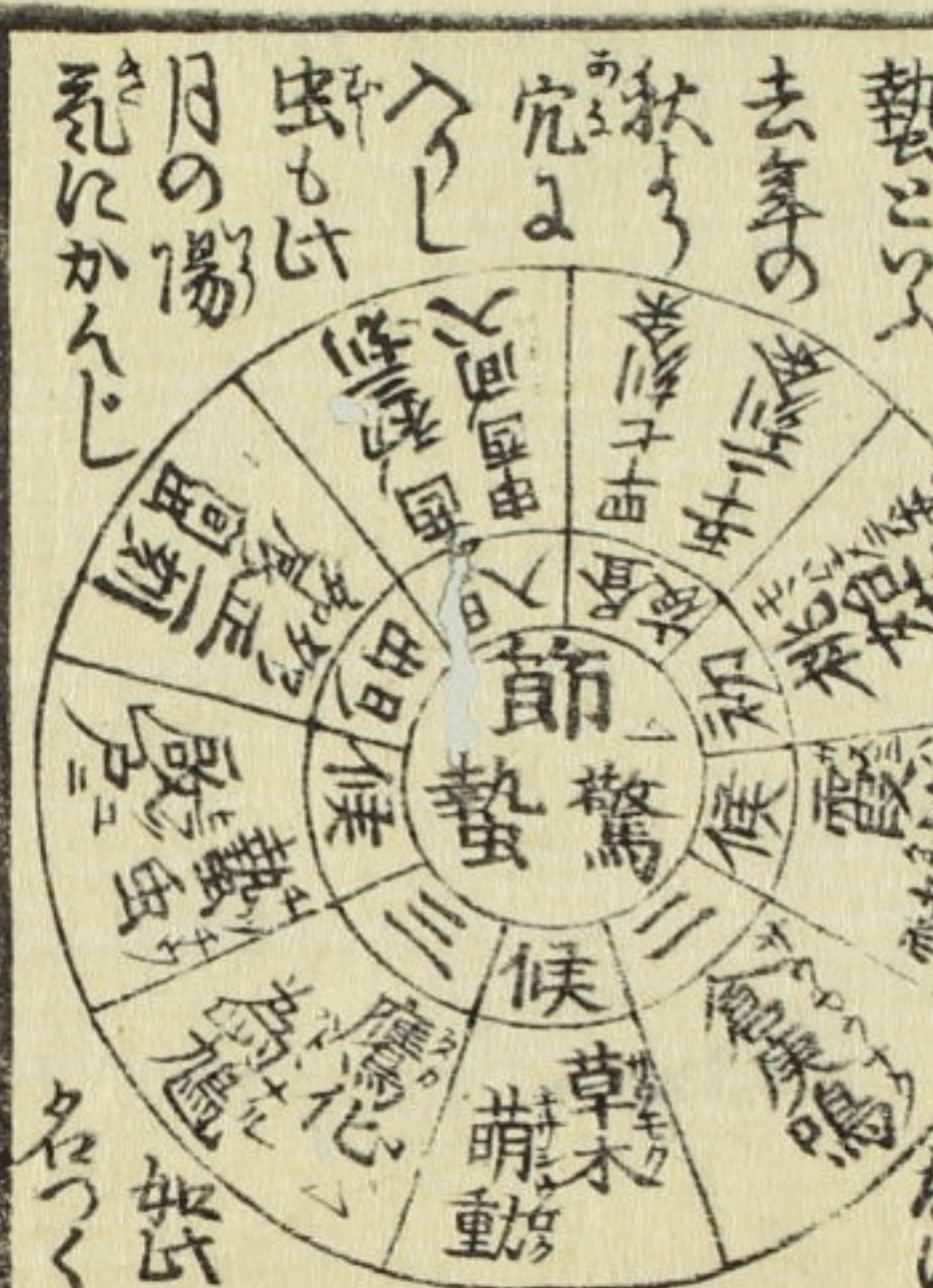
○ 莫信雪消月

○ とけてまゝと見えす富土の根の

○ 節 驚蟄七十二候。草木芽二

候。昼夜長短日の出入等左記

二月節と驚蟄



○ 枕姫花の枕の花いらさきま

○ 倉庚の啼の枝をさう俗にうぐい

その名をさすれども後へ余庚の

大板の辺に本写くこほ大さき

舌のてくさうさひをに似たり尾

こねとま毛ありつらうぐい

小似たり二月とうり知る○鷹ハ

陰類なる梅ハ陽類ハ仲春ハ

さうなるる感トて陰類の習

も陽類の梅と感とるなるる

仲まの良といつらう礼記出

妙術

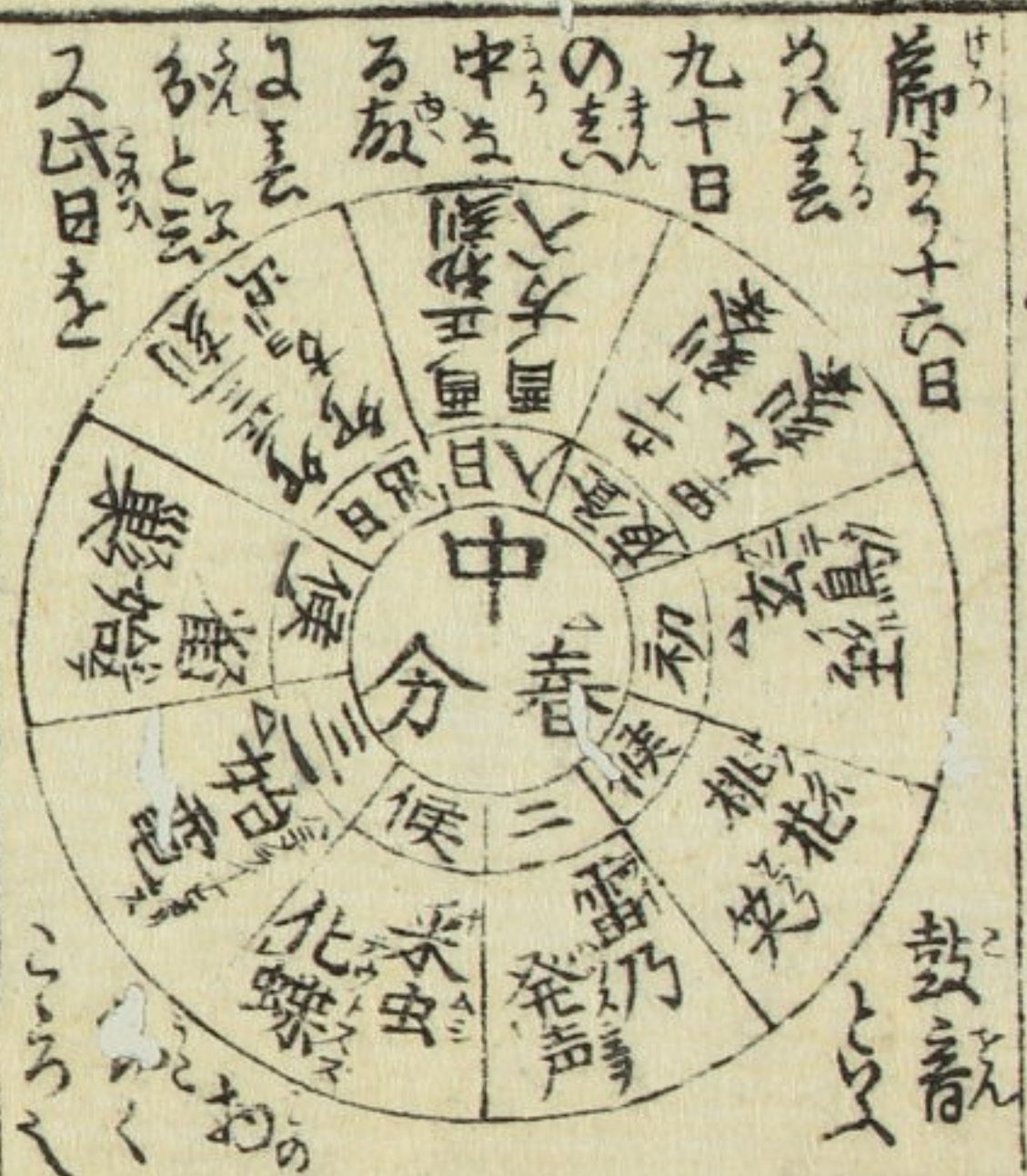
節占候

雷あれは雲の雲は

を来かう辰己よかれは

いあり雛の方早あり

中 △春分。七十二候。草木萌生候。日の
出倉長長。春。く光にさす



春分。ははむらこまの社目に來
 秋の社に歸るこ市中に來りて
 人衣に粟とひとひ子をまひ
 ○雷声をなぬことハ穀粟はは陰
 陽相濟る感トて雷となる云
 葵つるを雷といひるは死を
 電と云まハ陽に入るのこりり
 左葵あり秋ハ陰に入るれりり
 さまハ葵まき電ハ陰陽
 の接とをハ地ふありて上天よ

後とるおこのまかは日おのち
 さまいとくはれ時々寒暖と
 みいとさるは日あけて日の出
 るまで二分をさし日入を考
 考して二分をさし考
 春祭 日考妣先祖を考し
 考妣ハ死せるハ母成りハ
 先祖ハ祖父祖母よりハ上代
 ハ父祖先祖ハ我々の根を
 考るべからば日といハ一を
 入日ハ四時と云日ハ地時ハ春
 分夏至秋分冬至より考
 考二時を考てはは日ハ
 一年に一日ふて和俗これと稱
 月といハ毎月是日ハ礼にあら
 ど春秋の考りハは年生れも
 てはのこくハ早稲候具を候也
 春 天氣占候 老人星の日の
 分 夕の丁に候は

妙術

明日いよいよ日出でござる
れ遠志の心を去り

てせんで二杯のこてス〜
だせば痰をさう〜となく

無病ゆ〜長壽を祈るあり
實に是神仙の奇々妙法なり

吉野餅配

朝日花供餽
法の両行人

本堂へ出て御供奉幣
廣庭ふる餅をもちくさり

南都

西京薬師寺造花會
朔日七日まで金堂中

いろいろの造り花と供〜大法會
行々俗西京の死とをり云

二月堂行

南都之水取
朔日より十四日まで

牛王加持の修法あり上七日大像
観音下七日小観音の勤る僧侶

修の僧といふなり
俳あまや修の傍の出れる芭蕉

大坂

天王寺六時堂修上會
有朔日より三日追酉ノ刻

上丁 釋奠

孔子とをりとのり
二月八月兩度有

謚を大先至聖文宣王と申奉る
〜朝廷より毎年大學寮

〜孔子ををり〜と法
ては孔子と教子〜とをり大宰

府〜は孔子と関子騫と依
〜延喜式より文

武天皇大宝元年二月より
〜後花園院寛正年

〜應仁の大乱より
絶〜孔子へ上一人より下萬民ふ

朝〜天下萬世の師され本
〜朝〜終ひ〜む〜

〜礼記王制
〜秋奠とありあり秋奠と和

〜訓ふ〜

哥 年中行事

二位中お

かゝるのかいこたひをうらむらひとて
ひしやのあはれをうらむらひとて

俳 飯椀の補いそめる秋奠 嵐雪

秋奠鳥の及喃又せり

野坡

詩 上丁詞

唐 陸放翁

燎火明中庭老樹泣殘雨

○孔子之祀神前二庭火ヲ多クテ有サタリニカホトリ
木カハルアヲラトモトクヤウニキニル

白頭奉祀事 恐羅劇仰俯

○ワレラカゴトキ白頭アモハツリニカカリテモヲキフ
ニニテオカムモケルニキ

三終樂在懸再拜肉外俎

○三番ノガクドウケカケテアリニクラソトテ
オカムナリ

誰言千載後 恍若到鄒魯

○カク年ヲヘテ聖人ノ生コトイタルドウニオモフトハタ
レモオモハナシダ

吾國雖編小大社 祚茅土

○コソクニハイナカフ小サキクニナレドモ大キナル草モラ
ツミテミツルコトニ

如何儼章綬 日夜苦蕪楚

○ニカミカク官人ノ印ヲオヒテキビシクコルヒルハ
ツトメニクルニキソ

藏書如丘山及物無一羽

○吾ハ書ヲ山ノトクオサスレノミ井テ何ヒトツ人
ノクドモドコサテニシヤナレバ

吾其可憐哉 去々老農圃

○アハレムニキモノシヤモホコソツトメハヤメテ百姓
ニテ身ヲハタサシ

初 稻荷祭

諸國これを
祭る也

山城伏見のいさゝといへるハ
明天皇和銅四年二月十一日

は山に祀りて古層を以て
考ふるに日午と見五穀の

并されば福神とも唱ふ山を
この峯と云本社第一ノ宇を

市姫又田中社四大神併て五
座と云永亨十年三の峯より

今の地及してせり日ハ洛
中洛外より群衆す市人は

黍粟等の種をうるにあり

土人形をうろは深草の名
おまじりばく古の抄とてか
さしゆりし又とて行り
④ 夫木 知衣
いまり山形のおと兼さるはく
いへるいあるさるものうろ人

後拾遺 惠慶

いまり山形のおと兼さるはく
我おまじりし又とて行り

頭件

いまり山形のおと兼さるはく
あまのくのかさすりたる
延喜年月次第風初年兼の画貫之
いまりのそ我こそなういまり
まこれ能のまか、こらん

④ 心ふ皆松のまふいこふま考
うに病初年及の小篠束今

④ 初年いりまひ私をなばり
社に化さるなをどのまよ自梅

水間祭

和泉國水間觀音
行基の化聖武天

皇の勅願此日くはるり
年此厄難と除く草薺さるる

④ きつひの氷方流で
の鼻の先 後生 京 眞如堂境
内にある

京東福寺懺法

惠目山と号
法六時には根

の罪と懺悔する修行は日名画
光殿司の画の觀音の像世三幅と
かくるこ又十万の札として火除の
守とがすの紙よ十万の字とか

④ 叙るの像懺悔よ東福寺越人
いて寺内同聚菴よりいだし

摩耶叅

棋州免原郡畑原
村山上にあて佛

④ 摩耶山切利天上寺と云天
武天皇の御時法道仙人の創造

なうけ日泰詣の人へ福とぼる又
馬の無難と祈る土産もの毘

布と賣是と摩耶毘布と云
山の絶頂へ絶景と摸播又四国の

山海一目にのぞき見ゆるるる

俳 横濱のふたもはし 耶麻都丈

狂 系活の山の下からのなるこされ

湖春

近江本妙寺詣 今ハ寺院跡

たり旧跡ハ

三上山の日はとりあり今ハ初

年ハ指す節分はまこと上初

申上 南都春日祭 仁明天皇

嘉祥三年

九月始て中臣秀基奏聞とへ

て清和天皇貞観十一年十一

月九日庚申の夜初て行る其

式は夜才の季 関白藤原家

顯仲

松のさそいしやまごころはく

仲実

あめの下たえぞそそひさも

かすがのふれ神とまつことと

詞 小卓。翁人。妻。初。南。岩。三。岳。

上 大原野祭 山城乙訓郡

京より四里

許西の春日の社と日神

仁壽元年二月后宮御所の

け正、勸請をいたるなり又

大原野行幸さどもありたり

哥 年中行支 経賢僧都

きろく死やり入味まうと一は心

こやうけそくよ花のさそい

伊勢物語

大原やと一はのふもりつこと

神代のももたひいづり

詞 系毛車。むろろ。後。は。不。す。れ

俳 大原を本も女にとれお宗因

京 △八幡功卯。神系あり伶人

山井。多。豊。安。倍。ま。と。これ。と。勤

上 園韓神祭 古大内裏の

宮内省有後

松屋のつる昔ハ二月十日に

系議一人なる所に於て事と

右に後物醒井通あり 本誌云
非人にてふ其津の系都丈

不成 踏青節 二月民俗酒
日就日 踏青節 となつて

占候 二月雨 あれば蟹まよ
せん 占候 占候は早

迎富 携て郊外に出て弦歌
とん 迎富 携て郊外に出

賜尺 唐制是日近臣
賜尺 唐制是日近臣

蠶農市 唐土蜀の國に
蠶農市 唐土蜀の國に

萬神都會 二日とりひ日
萬神都會 夫婦のいと禁

出代 出替今日より来年二
出代 出替今日より来年二

行基祭 舟の毘昆湯川を
行基祭 舟の毘昆湯川を

二日灸 佛系小豆煮る巫
二日灸 佛系小豆煮る巫

祈年祭 中坐なく四時
祈年祭 中坐なく四時

二月 日令

出代 出替今日より来年二
出代 出替今日より来年二

行基祭 舟の毘昆湯川を
行基祭 舟の毘昆湯川を

二日灸 佛系小豆煮る巫
二日灸 佛系小豆煮る巫

祈年祭 中坐なく四時
祈年祭 中坐なく四時

二月 日令

出代 出替今日より来年二
出代 出替今日より来年二

行基祭 舟の毘昆湯川を
行基祭 舟の毘昆湯川を

二日灸 佛系小豆煮る巫
二日灸 佛系小豆煮る巫

祈年祭 中坐なく四時
祈年祭 中坐なく四時

二月 日令

年中行華 長秀躬臣
いのりて介比のとながれを代を

京 六波羅
行入寺ハ鴨川東五條より

七 薪能 南都興福寺南大門
四座の内二座休暇

狂春日のく新の能ハ名一あり
とよひの能ありでうらや貞柳

能地うたひの能まざる新が沾徳
兼に新の能のあり通し 其角

春日若宮能 九日ふ南都若
宮の二座休暇

勤 十日も同日
八 今日白髪

占風 東南の風水
西北の風ハ早し 祇園

八講 八講とは法花八の卷の大
意と論ぶる今ハ終る

九 遺教經會 釈尊の戒の
経ハ系十本

釈迦堂大報恩も又八条大通
ちりて終る十五日まで有

泉涌寺舍利開帳 十五日
通理

十 成 京 北山鹿苑寺祭同
天神祭社人射あり

十一 列見 六位以下の
有とのと撰びて武部

兵部之二者よりはれあつて上
々々政官に先しとせり

容依をとり入るるこ上はこ下
けり

非列名 茶石の伸と鳥帽
詞百をの巻がはれ被中ときか

非列名 茶石の伸と鳥帽
詞百をの巻がはれ被中ときか

詞百をの巻がはれ被中ときか

百花朝 十日とかくいり

台候 十二日 天氣快晴あり

の實より一夜雨ふれあし

南都二月堂永原大續松

二月堂(羅索院)云天平勝宝

四年(神實忠建)云後醍醐

井有是と信に若狭の井と云は

は井のあと取て修法あり

非麻ぞとび都の

花朝節 十日とく

占候 十日とく

蝶會 唐に花朝をとりて蝶

替市 十日かこの日

涅槃會 但槃像二月

二月十八日佛涅槃す

二月今月の十二日

改ごし

教王と稱して

竹の辺安樂院林の中

去といふ其名

中にも俗東條

殿司の画して

いふのころ

百花朝 十日とかくいり

台候 十二日 天氣快晴あり

の實より一夜雨ふれあし

南都二月堂永原大續松

二月堂(羅索院)云天平勝宝

四年(神實忠建)云後醍醐

井有是と信に若狭の井と云は

は井のあと取て修法あり

非麻ぞとび都の

花朝節 十日とく

占候 十日とく

蝶會 唐に花朝をとりて蝶

替市 十日かこの日

涅槃會 但槃像二月

二月十八日佛涅槃す

二月今月の十二日

改ごし

教王と稱して

竹の辺安樂院林の中

去といふ其名

中にも俗東條

殿司の画して

いふのころ

あつれやとやみままひん

⑩ 壁の音。さか。世捨る。左も。落の林

⑪ 非。又来て。其た。さらけ。や。花の時。老

⑫ 体業の。眠。と。これ。ね。らん。像。其。用

⑬ 不。と。け。この。様。の花。二月。夜。外。日

⑭ 狂。佛。で。も。た。た。た。途。途。の。も。な。れ。や

⑮ ね。と。人。像。を。い。か。け。た。り。か。り。こ。こ。志。相

⑯ 雪。果。仲。ま。の。節。は。こ。い。し。し。を

⑰ 嵯。峨。柱。礎。松。今。夜。清。涼。さ。る

⑱ 松。の。踊。躍。は。是。叔。迦。葉。り

⑲ 松。の。烟。さ。り。け。そ。騰。心。の。花。射。流

山。崎。賢。寺。親。善。兼。行。基。弘

⑳ 法。え。三。の。像。開。帳

大。坂。天。皇。の。御。示。日。は。人。の

㉑ 會。式。と。常。不。會。と。り。入

南。都。奥。極。寺。と。常。不。會。と。り。入

金。圓。の。子。れ。は。人。像。と。用

常。系。と。は。ね。ぶ。せ。ん

① はん。こ。う。京。田。豊。前

② 子。山。か。り。老。の。餘。花。煎。又

③ 日。小。花。く。そ。い。て。も。ら。の。ち。い

④ され。と。志。花。層。と。い。六。條。の。層。を。色

⑤ 六十。積。塔。光。孝。天。皇。の。積。子

⑥ 雨。衣。の。皇。子。八。三。目。人

⑦ と。あ。い。ま。ま。三。條。ひ。一。夜。十七。日。を

⑧ 雨。衣。の。皇。子。の。御。忌。日。は。日。換。校

⑨ 以下。の。身。改。系。を。會。後。の。小。池。邊

⑩ 衆。庵。に。住。み。接。塔。金。二。條

京。本。満。寺。日。蓮。師。住。あり

⑪ 存。極。通。純。馬。口

⑫ の。南。に。あり。祖。師。像

⑬ の。一。の。妙。著。圓。集。在

⑭ 八十。日。就。成。本

⑮ 峯。定

⑯ 寺。觀。音。會。式

⑰ 北。六。里。が。り

⑱ に。あり。大。慈。心。と。号。す。白。川。院

⑳ 皇。の。御。建。立。之。一。坊。あり。修。驗

者なりけ日風はげ々れハ世
に大無山のあまなりこあり

十 貝寄 かひいせ 天王寺 曼殊院 まんじゆいん 華 け 寺 てら

解る思成位 しんじやうい 者のうらへり
古くは日右貝 ひみぎい といはの浦 のうら なる

ハ新 あたら 外 そと より より きたり きたり くる くる べし
は日の月 ひのつき と貝寄 いせ 同 どう ころなり

哥 續後撰 つぎのついで 天教 てんきやう 聖教 せいきやう 大旨 たいし

貝寄 いせ や外 そと に に 寄 よ ひ ひ せ せ 相 あひ 干 かん 那 な

観音 くわんおん 誕辰 たんちん 日 ひ と と 祝 いわい 考 かう の の

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

今 いま 二 ふた 月 つき 祭 まつり 乃 の 八 はち 日 にち に に 山 やま

と と ひ ひ ら ら 死 し け け 日 にち と と 十 じゆ 二 に 月 げつ 乃 の 八 はち 日 にち に に 山 やま

一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

廿 ふた 一 いち 日 にち 浅間 あさま 祭 まつり 信州 しんしゆ 浅 あさ

① 我々の風しめぬど如き令毛臨

② 天の事の案成りて 衣未

何ごかく面ふそらにさこのまに
倉ふ系并勉土退屋

太秦廣隆寺
今武吉ふ堂
無敵中像

京
後鳥羽院
の卜衣にこそとほこむ市

④ 西蓮の書いけり
近江比良
六條

⑤ 白髪にほほ 桓武天皇十
又奉に始りけ日必とほあくあり

⑥ 秘の徳未とかくきんごる
非さく後よ取も八海の日如帶渡

⑦ 京
小社△天神御忌日
天鷹年中小社社之建

⑧ 廿五日
廿二日廿六日天鷹大自在天

⑨ 右禪院に八講あり公奉根原

⑩ 神のかさあがう
若の若ありてさるね院天仁

⑪ 二年より右禪院ふて八條を
菅原の宗子ありて是と終り

⑫ 云く奉親父權大仁匡衡曰天
後自在天神のありひ天トに

⑬ 陰樹一人と補導し天トに
月日ごとく美良と忍原し

⑭ 秘中文道の大徳月日の執
元敷山住心院の徳心敬信

⑮ 都は聖堂に於て連言と治
或時 人とあうてある時未と

⑯ 云かにあいつの棚りのならぬ
あうらんとけられぬも天紳

⑰ 感ありてふふ於るふの大平之
水の巻那像の巻二巻と掛け

⑱ たまふとる人それより魔
中又傍起のやしる成た

⑲ てけふの字といつり

或曰是時... 信をばへりす
開陳はねて... 備前伊予水戸

河内... 通明寺
開帳志貴... 昨村放仁土

推古帝の勅... 聖徳太子の御位
たり天神の御社... 天曆元年

天孫と云は... 天
三百六十六日
六廿
日就成不
日八廿

和の節... 天孫の御まかん
トて天孫なり

月令... 三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

三月五日... 彼者
三月五日... 彼者

これ春秋七日の事とつゞくこと
どむい事たりたりぬえ砥平
石の録は彼岸の日本の風俗
そのりしとまゝく歳時記不出る

茶の子 畿内の流俗あり七日
の間亡人の日ふむる

野菜の食類と知音の人ふむる
非彼岸舎の茶のゆへは

彼岸逆僧 行方有尺牘

我等亡母高彼岸中

先慈諱晨偶中彼岸

日以因之摘菜蔬供

會預設蔬齋伏乞王

靈おの付逆所傍況

趾臨敝廬為修其冥

徑馳聞致度い山路
福則存没均感賤价

凡市若另心相奉
謹言 奉瀆

尺牘 書替 上中下

玉趾 ①宝秩 ②御座 ③賤价 ④小伴奉告
交文座下 飛錫 奉瀆 ⑤銀鹿以報

彼岸 天王寺祭 彼岸七日の
出て修りす男女老若を中
中婦人の衣類をかざり我
よ競ひ出てまはるといふ
みおの衣類をいふいし

排障も神ぬきかけて彼岸がま若
彼岸をいふは又吾む日る備山

在肉のいふ人さ彼岸も并やあて
此の世後をやはる唐外一朝

同誦念佛 天王寺念仏堂
ふて修りあり

天のの名字として廿八菩薩
の画像をかけて修りす平野大

念仏寺より持来る又西門を

極東の東門にあると昔より

其下にあつたり西海の入口を

観ざる弘法大師もは西門

よて日想怨と修したすい

まひらん中日の形をばは

入目をとおぐまらんがため

開かるるころへびんを

京 御影堂△時宗踊念佛

六條格西にあり毎年

春秋二季の彼等踊躍念佛

あり中世に末尼を携へたに

麻と制す御影堂△格と

ち号成秋長光寺と云ひ

そらに仏身と謝して余念

なくれどりよはるるの

法苑徑ふけふみあり

一遍上人

とねばも子ねどふおれまの

法の及よと名だるるぞ

狂 世いこれてま後の為おとて

らみの新堂確念佛 声可

社日 立春よりみつめの戌の日

と春社と云ふるじよは

土の神とあうる土ハ多物とやし

なひ五穀と生す春ハ農事の

よからんゆいゆの秋ハ其及

徳と報ざる意なり燕ハ春社

日にあう秋の社日よなる

排うお平にたて教よ燕め斜水

社日 左傳曰共工氏子

故車のいりふ足の達とるふ

好舟車のいりふ足の達とるふ

光獨り足すとつりては能水土と

平ぐ故し祀りて社とす勾龍

と風俗通云脩らる

方壇 壇と築きて土地の靈

祀る豊饒といの

陳平分肉 前漢陳平里中の

社の宰ころる肉と

分事甚ひとし 父老曰善哉陳
孺子 宰たるや 陳平曰嗟乎我
と天下の宰たる 一れば ば ま こと
肉れ ごと 一 云

治龍酒 社日よのひ酒と云
石林詩活 よ 出 り

社日よ酒とのめば 龍 龍 と 治 と
こ い なら り 一 なる 故 なり

詩 兵部李濟

社公今日没心情
為之治龍酒一瓶

社美 唐吳越の俗必美
と 以 祀 る 一 こ 一 り

社翁雨 社翁いづれ水と食せず
故に社日翁雨 の 雨 の 雨 の 雨 の

詩 社翁ノ雨五言詞

幾點社翁雨一番花信風
社日ノ雨ハ草木ノタニハ父母ノゴトニカ
モ年中一番ノ風ナリ

詩 社日七言詞

今朝社日停針線起向朱

櫻樹下行 社日ニ女ハ皆ハリシトナ
ヤシト墨トヤシト能ク行遊

男女嫁娶 周禮媒氏の注
陰陽交て以て管

社とま守 天の時 順 ふ 一 こ 一 り
され ば け 月 婚 姻 一 よ 一 う 一

紙鳶 春の風ハ下より上
の ぼ ろ 紙 一 を 一 う 一 て 一 起 一 る

狂 い の り 一 を 一 あ 一 け 一 て 一 ら 一 れ 一 の 一 風 一 よ
ぬ 一 い 一 ま 一 り 一 り 一 と 一 か 一 の 一 木 一 端

紙鳶 箏ハ琴ノ漢李鄴
故事 管中ニフ井テ命

風 箏ハ琴ノ漢李鄴
管中ニフ井テ命

鳶 ヲ 一 ツ 一 ク 一 リ 一 線 一 ヲ 一 引 一 風 一 ニ 一 乗 一 シ 一 テ
ノ ホ 一 ス 一 後 一 ニ 一 イ 一 カ 一 ノ 一 首 一 ニ 一 竹 一 ヲ 一 以

笛 ト 一 ス 一 風 一 コ 一 フ 一 ク 一 メ 一 ハ 一 聲 一 ヲ 一 ネ 一 ス 一 ソ
声 ヲ 一 ヒ 一 ク 一 カ 一 ニ 一 ト 一

未央宮ノ遠血ヲ量

漢高祖陳豨ヲ征スルトキ韓信
紙寫ヲツクリテ遠近ヲハカリニナリ

得子 二月乙酉の日の午ノ時
夫ぬわぢにをハ必孕ヒ

初雷 仲春に初
めて雷と

初雷 仲春に初
めて雷と

古今集
天の系ふことあうりなるか
ふり入中よころるものこ

詞 なるも。とろく。ひく。
こあ。おし。タマ。

俳 かにうに海とてあの新や左近
雷や他のまのまのの 嵐雪
雷の姑のれやふの父母

狂 ぬらぬらふるふるふるふる
ふらふらだふらふらふらふら 遊山

詩 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株
光乘風雨入天都 急雨過

三國英雄空失勢 對雷光
一鄉孝子為傷心 聽春雷

山鳴喬木例 滂沱無所避
水激蟄龍飛 霹靂不堪看

雷電 人君之象 雷ハ二月ヨリ
百八十日ノ間

二地ライヅル即萬物モテタ
地ライヅル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニル万物モニタ地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

二地ライヅル即萬物モテタ
地ライヅル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニル万物モニタ地ニ入ルハ
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象

雷植

陳ノ時蘇紹ト云人雷植重九介ナレモノヲ

得タリ宋ノ時沈活震木ノ下ニテ雷禊ヲ得タリ芥ニ似テ

孔ナシノ時珎曰雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタル

モノナリ云々

○本朝ニテモ雷ノヲ千タルアトニテ

異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロ

正ルテ諸書ニニエタリ

雷除ノ守 越ノ白山鶴也リ有

有其處と書ハサレバ雷

雞とのがるク九に景あり

○哥後毛將院御製

白山のねは本陸よか



候霜

霜の目より百八十日

又秋馬進めて中より来る日十八日めのあより

氷口祭

掃へるにあはれぬ

代水と引入る口とをふるまはる

湯にれハ苗瘦深にれハ苗腐八九

日と後て苗ころハ一五ふまは

の冷暖をこれよりて氷口とあ

はるハみ十串に幣さしは

○夫木

師光

ますしとろうまのふい

まそそ水にさるつやどハ

○俳あにのそ十屋とのぞ

田畑野山を焼

芝焼。旱を

ハ地と焼て捨るああり是を

火業といハ和名ヤ

て焼て後耕（と）かり又田畑とや（い）むの根と（い）りあふ（い）けが（い）け（い）るなり

哥 古今 業五十一

ま田の（い）り（い）る（い）や（い）と（い）る（い）あ（い）44の（い）つ（い）も（い）り（い）れ（い）て（い）我（い）も（い）も（い）れ（い）り

萬葉

冬（い）ご（い）り（い）ま（い）の（い）大（い）神（い）と（い）や（い）く（い）ん（い）の（い）焼（い）と（い）ぬ（い）も（い）我（い）と（い）り（い）や（い）く

俳 土（い）も（い）君（い）と（い）せ（い）う（い）心（い）と（い）後（い）言（い）水

陽（い）と（い）や（い）く（い）や（い）思（い）に（い）南（い）と（い）北（い）は（い）冬（い）左（い）久

烟（い）燒（い）や（い）ま（い）の（い）れ（い）こ（い）う（い）た（い）後（い）後（い）許（い）六

狂 ち（い）と（い）う（い）ま（い）あ（い）こ（い）ん（い）の（い）火（い）と（い）ま（い）言（い）神（い）の（い）死（い）火（い）の（い）神（い）ち（い）廿（い）辰（い）も（い）や（い）く（い）り（い）ん

季 御讀經 二月八日に内裏

此部（い）の（い）二（い）月（い）一（い）十（い）月（い）の

草木の（い）ふ（い）い（い）と（い）あ（い）つ（い）む

此部（い）の（い）二（い）月（い）一（い）十（い）月（い）の

草木の（い）ふ（い）い（い）と（い）あ（い）つ（い）む

草木

此部（い）の（い）二（い）月（い）一（い）十（い）月（い）の

苗代

先（い）初（い）種（い）の（い）儀（い）の（い）後（い）と（い）川（い）あ（い）に（い）漬（い）し（い）後

取（い）出（い）す（い）る（い）み（い）七（い）日（い）と（い）種（い）て（い）佃（い）田（い）と

苗（い）代（い）と（い）ら（い）い（い）

夫木 俊成

た（い）の（い）り（い）な（い）ま（い）と（い）は（い）川（い）と（い）せ（い）れ（い）り（い）け（い）て

そ（い）う（い）り（い）と（い）ら（い）み（い）と（い）ら（い）の（い）種

拾玉集

表（い）なり（い）心（い）田（い）の（い）姓（い）ハ（い）苗（い）代（い）乃

あ（い）ま（い）の（い）こ（い）と（い）を（い）ん（い）ひ（い）く（い）ら（い）ら

堀川百首

又（い）後（い）せ（い）ハ（い）小（い）田（い）の（い）苗（い）代（い）と（い）ら（い）い（い）て

た（い）ね（い）や（い）く（い）種（い）と（い）あ（い）ら（い）く（い）た（い）ら（い）を（い）け

連 苗代（い）も（い）ち（い）も（い）枝（い）と（い）ら（い）つ（い）ま（い）り（い）知（い）肖（い）指

苗代（い）は（い）枝（い）と（い）あ（い）ら（い）ま（い）の（い）田（い）西（い）部（い）昌（い）叱

俳 苗代（い）や（い）草（い）ひ（い）も（い）種（い）と（い）ら（い）い（い）の（い）あ（い）支（い）考

水（い）邊（い）て（い）種（い）の（い）芽（い）と（い）苗（い）代（い）田（い）

狂 苗代（い）と（い）ら（い）い（い）と（い）人（い）の（い）心（い）と（い）あ（い）ら（い）い（い）と（い）し

繩（い）の（い）と（い）ら（い）ま（い）く（い）と（い）ら（い）い（い）と（い）ら（い）い（い）良（い）木

苗代菜黄

二月（い）実（い）熟（い）と（い）ら（い）い（い）小（い）麥（い）の（い）出（い）た（い）お（い）こ（い）

哥 夫木 苗代菜黄

小山田の苗代々このまゝにて

こつちのまゝよもふらふらふ

非 菜黄のまゝも秋さるる苗代田天川

種浸 菜どうあるにせは彼等の
ちん種とあにひひを種

種後よゑ出く種と下す

詞 たい伏 △種おと 種をさるる

哥 十首 為尹

種いすのこもひひは小山田の

たぐいとちうらの苗代のあ

種井 種と濁る井と名づく
新選六帖 為家

るさへのあせのかうひひにたはにて

たる井のたねいもまじりたり

非 ちがふの本と種は種井かま著

湯種 農人種とぬる湯は種
てやひひをさくせすと

又漬たる種と火のかこころらと
あぐりるもまじりす

種蒔 △種じ △種下

哥 夫木 國信

然のとり苗代々をあせおとて

今うそ種井に種下しはる

非 種下し依もさくは小種か其角
藍蒔 麻 非 孫つれて麻蒔
ましく畝の小きか 芭蕉

葺 異名 紫塵 初は葉ふる
さ附これと合ふ小兜の香か

の曲らやうにもえあるなる種
して葉とひひく附は鳳尾の区

高二尺ふもかよ入其根葉を
皮肉捨てらして再こぼしひ

製法とれば昔粉とまらぐ
用ゆるなり

詞 たいふひ △かきまらふ たいふひ

哥 新拾遺 たいふひ 和家

たふのはハまきかふのかさささひ
つけハまきこらんあさる

哥 万葉

若くは無名の上はさわりひの
もえ出るまよなうけりつる

哥 丑槐

山里の産のさくらびみとめて
かきまはし又年もほそなり

詞かきまはし。さくらびみとめて。こつん
のりへをひる。小舟山。かきまはし。のり

連 印くさねのちうとすまの蕨が紹也
「さつびもあそぶのねさうくま玄仍

俳 ぶさびのやまや折の先 蓮三
「ぶさびのいらぬ袖の内

狂 ころりあげさむさうさぶらへん
まごんさうはすまびぬ人遊山

詩 蕨薇詞 杜子美

雨足空山少 蕨萌春深直
直 直 直

直 直 直 直 直 直 直 直 直 直
モ、エイトナ正春アカク

十リテニヨキトハル
紫金莖ハワラビノ名也 伯夷不食

周家粟未必先知此味清
龍飴炙カ看陽山ニカクレテワラビ
喰ソメタルユエニ今コノ味ヲシルソレ
テハシラナダテ
アノフトナリ

詩 蕨七字對句 詩礎

承露未開仙女掌 元無骨
ワラビニタトヘタリ ヤハラケルコト

擎天先出小兒拳 已作拳
コソレトケル

口中藥 ワらびあやここの分り
まやこみか昆布の石付まやこ
まを合せて脩まはくを合てぬ
與癩之藥 くらびの粉とろり付る

蒲公 僕公嬰。蒲公丁。黄
地丁。白鼓釘。金簪

和名 ふぢな つまこしんもつたん
不つこしんもつたん

哥 花さくも人やいめのはらみ草
若うま世のまをたれし

公通

⑥ たんやや 嘘子一と 翁入ての 雲霞
引く袖う 縞をばさう けくさる 野岐

⑦ たんはくし 翁のたけて 雲霞
えはく 縞とくやけさう 左久

杉葉 土葉のたけて 雲霞
るさう 或ハ形 土葉に似

て別よ 雲霞とくさう 料ありとく
大和赤州 白葉 杉葉 似さう けくさる

⑧ 藻鹽草
かこのまが けくさる 雲霞
さう 雲霞とくさう けくさる

⑨ さうびも けくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑩ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑪ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑫ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑬ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑭ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑮ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑯ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑰ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑱ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑲ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

⑳ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

㉑ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

㉒ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

㉓ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

㉔ 狗脊 脊骨のてくさる 雲霞
かこのまが けくさる 雲霞

虎杖 あはちのしや 日本紀反正天皇
肇 **淡路宮** 淡路宮ニ生シタコト

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ
時タチヒノ花オナテ井ノ中ニア

リ故ニ御名ヲ多遲比瑞
齒別天皇ト申シ奉ル

狂^レ田^ノか^ハ扱^ルふ^レは^レく^レて^ハひ^ろく^と
かたけてもどろの虎^のぬ^ぬ 挑綺

葑 ふら **異名** 長生葑 翠髪
和名 古美良 出テ 美良ニ出ス

中心莖と抽き白をひらく
生^のもの^と山^とら^らい^らふ^ら

能^疑る^香て^は葑^のみ^れ髪^陽水
取^ひの^入ら^と出^す 生^まら^の

け^と能^み合^せ耳^入と^てひ^の
か^らど^ろと^とひ^とそ^かり^べし

蒜 ひる **異名** 美菜 卵蒜 **和名**
比流 和名 比流 蒜 ふいこ ヒナリ

ハニクム^心香^ハ **野蒜** 皆食之
臭^ユエ^名ツク **野蒜** 皆食之

葑蒜 **倭健尊** 日本紀景行天皇
皇弟テ御子日

本武尊東夷征伐シ玉^山海^ヲヘ
テ信濃ノ山ニ入^既ニ峯^ニヲヨ^ニテ夫

ニ飢ツカレタ^ニヒシ故^ニ山中^ニ御食
ス山ノ神コレヲ見^テ白鹿^ト化^シ玉

ノ前^ニ立^テリ王^アヤシ^ミテ一ツノ
蒜^ヲ鹿^ニ彈^カケ^レバ眼^ニ中^ツテ

死^ニケリコ^ニ控^テ忽^道ヲウシ
ナヒ出^取ヲシラス時^ニ白狗^来テ

王^ヲ道^ヒキ^テ出^ル
コトヲ得^タコト

源氏品定 とくこのまにあ
るいすめらちりて

た^あら^れる^あし^すめ^れは^蒜ら^ひて
依^れて^共考^へう^せな^らふ^らり^り

た^まへ^いふ^この^さか^のう^らま^ひて
る^この^さか^のう^らま^ひて

あ^や **雅露之歌** 齊の田横カ
門人歌ヲツ

薺花 （異名）護主草 三線柳
とり入花白く小児は

草の莖とにらえよん引張
ひげバニ味縁のきつ花の枝のじ

◎ 家集 好忠

庭の面うかづみの花のちん入と
まをそ清ぬちうとこさかり入

◎ 狂 ひとりの三味せん茶のめここし
なつらなこころにけはぬら舞一

菜花 菜のつひはかたす入菜の
たぬ ◎ 連二

大根花 （非）大根の花をこし 一畝方
ほとを付たり

鬘草 （非）かたさこ極の下
すく草をこれ 舊草

末黒之薄 袖中抄に竹の
末黒とさし入

一從よとくこのまふのまのま
とら入もつり

◎ 夫木
下ゆえのすくろとら入まふま
やけのくすれまらら入り

◎ 草芳 解あつまのか入は
秀らつとつ入なり

◎ 詩 芳艸之詞 文選 菘華

◎ 詩 芳草七字對句 詩礎

情如芳草連天碧 穿蒼陌
三三三

身似揚花盡日狂 如有情
カラハアソビアリカク

草若葉 若草といふて

正月の季さうり少し長ト
たるといふ△菊の若葉△鳥の

ワカ葉△萩れまの葉

◎ 非 若のつれ葉少ぬのも大はを 菘

完帳の夜をけしや神あはれ 支方
愛ふ道坂ふやんとささりあふる

萩之焼原 萩のまぐらも
初る黒き芽あり是を焼や

つり其外説いろくあり
いまごはぬびらりあうげ

爰ふつへおさへもけりさか
燃骨と心得てまうーゆふ

哥 新千裁 寂蓮
まふのこぞみー折返のまふふ

非 焼くもたがうの萩のまふふ 雷安
やけもあはれおさへもけりさか

芳角 芳の推△角祖芳△章
まふのこぞみー折返のまふふ

哥 萬葉集 石川女昂
我まじ耳まよくゆあーいひの

わーいせつーあたらへー
連り出ておさへもけりさか

絶巴

非 流袋もささりあふる へか奉吟
角せらぬのさしあつてささり

狂 かさかかあーとさあああ
りまふれたるかまのさしあ

詩 七字對句 野相公
紫塵嫩 蕨人 拳 一 幸

碧玉 寒 蘆 錐 腕 囊
よもぎつひ 通俗達 の字と月也

艾摘 かり制法してささり
又食およもあつかり

哥 家集 好忠
あつ小田のこぞはねのふつ

今いまもこいこぞふり
夫木 俊成

かろいとて麻のよもぎはな

あつてあれおののかりや

百人首 實方

からごはれとやハ仔吹のじと

作しもまふさふもあつかり

非 加げらるぬき丸のまゝ 由水
ふく袖のころけ白ひらも丸 晩水

奴薬 艾とくせ丸 服肛とぼけ
ぬい治す 痔瘻病 ころけ

 若紫 (異名) 紫草
目より用く根の


皮膚を御布とほり背へとりて
衣とほりしそとさうぬく

哥 伊勢物語

かそがけくあひさたのすり衣
まのへのみんかさうきもほ

非 ちりくめまむとぬはむじぬく

そとせのりのほろまうす

 接骨木花 まき葉にえた
つて花をさ

多敷十花攢簇す臭きありとま
あて後まふあり本と腐して打撲
傷扱と洗して切有とろり左三骨
と搗ぐの文まかり

非 関左の母の受ひし樹皮は寛果
疝氣薬 たづの本に其草合せ今

銀杏花 (異名) 鴨脚 花の色
青白之二葉二花用

非 うばぬの白く根をけ花を芭蕉
花てあふあふ人見とさうの掃

紅梅 くまぬはて花の正
勢もつあんど似たり

紫梅 お名ふし神の分
お名ふし神の分

麗枝梅 お名ふし神の分
お名ふし神の分

紫梅 お名ふし神の分
お名ふし神の分

服梅 お名ふし神の分
お名ふし神の分

紫梅 お名ふし神の分
お名ふし神の分

新千載 元補

右のかに... 新後拾

新後拾

ふりかゝる梢の雪の影あけぬ
くゆる井うすれた梅はさくらんれ

哥 後拾遺 之浦

梅の花香はさくらに白くひらけ
うさぐさくこくこくこくこくこくこく

哥 家集 道達院

梅の死ねるは日教くこく
外面の雪は枝にまけき

哥 類聚 紅梅邊 雅世

まふらうきと新梅の梅のねら
梅の死ねるは日教くこく

詞 朱の唐。紅のち。うさぐさくこく

。林の本末は梅さくら。由りさくら。さくら

つひこくこくのいろ。おのむさくらさくら

非 紅梅の巨魁の火さくらさくらさくら

紅梅の死ねるは日教くこく

狂 美とさくらさくらさくらさくら

花さくらさくらさくらさくら

詩 紅梅詞 貞柳 韓駒

路入宮家百步香隔簾初

識漢宮粧 三千八百ヨキ屋ニ入

ガアリテ其六ヨリホヒハニスヲ如

テ、見一ナルガ漢宮ノヤウナルゲ

直疑夢到昭陽殿一簇輕

紅洗淡黄 昭陽ハ前漢成帝ト

殿ナリ紅バイヲ見ハハソノ殿

ハユメノウチニキタルヤウナリ

詩 春半花絲幾多應不奈

寒 春ハナカハナシレ

識渾作杏花香 城コクノ人ハサム

今テコ花ノサカントハエカニヨリテ紅ハ

イヲミテモ梅ハ思ハス杏ノ花カト思ハス

詩 紅梅五字對句 紅梅五字對句

照溪如濯錦 嫩蕊融紅雪

隔嶺似流霞 繁葩剪絳綃

詩紅梅七字對句

詩楚

春水薄涼燕脂片

香不盡

寒日晴烘蜀錦机

酒初薰

壁上詩

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

サカニ二開ク時一婦高キ髻ニ大ナル袖ニテ高ラニ倚リテ

モテアソヒ詩壁上二題ス南枝向暖北枝寒一種春

風有兩般憑仗高樓莫吹笛大家留取倚闌看

狀告紅梅ノ盛文 尺牘

庭前庭 滿開

蜀錦奪目 邀士

人貴云云三人お招き

足下典二三條 奠

神像奉掛連歌お供中 聖像 共暢腸詠之懷

持帚俟

尺牘 之啓上中下を記と

滿開 芳采。芳妍。綽約。明媚。馥郁。邀士。吟客。佳客。

逸人 足下典二三條 上公共同 遊中 君且負條 暢腸詠之懷

上將駢吟筵 中催寬興之會 欲試賞遊

狀 紅素返事

梅下續詠之催趣喜々雀

子知公孫出内席てはん

躍 豈不登臨

如例又云屋座後中ひの上

文楸 附馳使

尺牘 上中下云務と記と

催趣 促遊。展懐。遊宴

喜々催躍 快衆心。想甚欣然

上 称快万衆 甲 何喜如之 豈不

登臨 上 步而捧誦 中 詰鏗金

吉 上 入廣夏受奇璜 中 馳

驚而容吟慰 中 参扣且唱愛

馳使 介子。僕士 上 貴宴。

遽使 中 端价。走力。銀鹿

八重梅 花の八重なるへ

狂 新波付の梅をさるうとどか

け白り八重う七重勝ひりく

俳 八重梅や尼の 座論梅

花浅紅より葉多く実一枝

ありあり人のたしむる座と

ありとふふたしむる

越中梅 花大ふりて向く溪

紅と帯を流梅に似

黄梅 迎春花とつ梅に似て

正月に開く故に迎春花といふ

俳 鬚も黄の若し香は梅香

初櫻。初花 ことごとく一重

早く咲く梅の惣名より初

花いさだそめる意もあり尚

三月草木の部小くハ

哥 万葉 人丸

佐のいの里に足しう初花の

ましえつらと忍びあるか

哥 續後

伏見院

笑をひるか山の花のち見えそ
る遠にこころの炭のあつき

哥 新古今

家お

ちうらんらん志のべも花あ
たつたのふれおざうし花

待花

花のもとにゆきても
はや花も咲ぬとあふを

哥 家集

頓阿

とくさへて花の木の芽も春西に
おほまなきさふさうらうら

哥 新拾遺

俊成

山桜咲やらぬるはれとく
すこてそえたる春の月の

狂 狂まう笑うとして待とよみ花

本の下によされ 系櫻 去たう
まうして鳥有

いひ無糸とついついお
こまひとくにさくやうり

哥 あすもこ人志う桜の枝細と
柳の糸よむすはれたり俊頼

俳 百すらし表のたあ糸桜野坡

系桜名も指しとねえ外京甫

凡 吹い屋も掃たりいとさう北枝

狂 たくちの庭に咲か糸さうら
むさんた海の上うと見るらん貞大

今こいへいさ 姥櫻 草短
いと桜の木端

密てまはる老女の蕾または露ふ

俳 花あといれいの晩桜 立甫

狂 蕾はととこうの桜あつてさうら
花うさくこいれまいお 左柳

児櫻

花白もつ死辯阿へ
抱てあう本花何う

俳 ね人の見るものに 一重桜 一重の
せんねんこころ 鯉花

哥 花さくさくおさうははての桜花
たぐひとくさるさもいさうら

① 徒て出る一重を **彼岸櫻**

一重、桜の葉を **千丈**

桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

あつて春分の日、咲く頃、十日

那、桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

① 徒て出る一重を **彼岸櫻**

一重、桜の葉を **千丈**

桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

あつて春分の日、咲く頃、十日

那、桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

① 徒て出る一重を **彼岸櫻**

一重、桜の葉を **千丈**

桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

あつて春分の日、咲く頃、十日

那、桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

① 徒て出る一重を **彼岸櫻**

一重、桜の葉を **千丈**

桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

あつて春分の日、咲く頃、十日

那、桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

① 徒て出る一重を **彼岸櫻**

一重、桜の葉を **千丈**

桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

あつて春分の日、咲く頃、十日

那、桜の葉を **千丈**、咲く頃、十日

接穂

異名 接頭。小篋子。 壓木。盤砧。花のあ

果もつれ枝をつぐこころ

ちる若枝の肥整する陽にひ

たるどころはへり接目多

らに緩ゆるす皮と骨とをひち

がらぬ申すべし春分と節

とするゆゑにひかじり

① 小刀のそれららるる接穂

月新の接穂はさまたる接穂

接穂の接穂の葉や花を金

接穂に於けるのそく接穂

茄子栽秧 ますし極時

根にかきて泥をいれ

もろこしふり一尺

肥地又坑とすて坑

土を壟く盆のことく

西瓜撒

種蓮

ころねと葉のせいで
るるふいなる泥を

栽し根

挿壓 木の下の土
にうたれさせ

分きう目を入れたら泥を
其枝の上より本の方まかに土を
かきの方まかに土をうけ
あど時土の上をうけし次の

本木の方を切り九月下旬に
栽し五月梅雨の時分根を生
たつものと知るべし 今月木屨
躑躅をうせしにうたれし

壅培

根本の土をうけ
とるべし 石榴 梨 海棠

等にはうけを糞の
糞より或は馬糞を用し

挿木

此法ハ黄土と目に
未してゆとるかに

よくまてへ六七寸はうり
はきかためて枝を馬の耳ほど

にそぎ同し大きさを
本の枝を先穴とあけ其穴に

そぎたる枝を五寸は
水とそぎ陰地より或は上

おひをこまへ月と
に至りて根を生じたる

栽のべし 今月日本
檜 栢 樅 丹 栢 羅 漢 松 海 紅 海

棠 山茶花 石榴 櫻
薔薇 黄 梅 櫻 等 抹 藥 種

根 沈存中か
二月八月と用ひ
二月の竹の芽を八月の苗へ

だくを放し
て茶條のわく宿根ある
の則苗を

修樹

菓樹の小枝
実とむき

生類 は 故よハ二月一ヶ月
の 生類をさのこ

果鳥 か 不トモ。か不モ。いも云
は 鳥 浴カホクト

もこしつり 未はまびつるるす

哥 夫木 光俊

万葉 釣あはしこく 采もげんがらも
あふよ 志もあつとすすふく

雉 異名 山梁 野雞 前漢
の高祖の夫人呂太后の漳と

和名木々須 昔ハ名ハ雉子魚ハ
鯉と云上とつろのはまて茶もをらハ

雉子 たおさきりの 池湯屋の
うへにかつらるもろろかろす

其外いふたこといせおぼく二月
むらに木のつり枝にほじとほけて
とれたのむらたためたとれる花ハ
とれたもろろあはれありける

詩 雉七字對句 詩礎

田夫就餉還依草 共啼花

野雉驚飛不過林 起平原

詞 雉之詞

白雉振朝飛 吉来衣太平 朝廷

若鷄鳴 吳鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出現スカ
号トセシコトアリ 楚郊疑鳳出陳寶

童子懷仁至中 即作賦成 皆雉

黃君看飲 咏耿介 獨含情

求食スル体ヲ見ヨステ

諸鳥ニスグレテニユルナリ

雉之 フホカナシム

傳田悲 春秋ノ時衛公
ノ女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル

鳥鳴る。かつしぬ。あし
まはらるる。かこもかくも

連るの目とかなる羽の夢が背拍
非ほむらに付てはる箱通連三

浦をふる孤燕の影が水
宮家もとぬけ遠る社のも 向隠

山の傍に燕をうらむ入日か其角
たてまも様もあはれもあはれ

狂をまにまをうらむのつらら
うらむのつららをうらむのつらら

たてまも様もあはれもあはれ
はむらむらとむらむら

詩 燕之詞 白樂天

羽族知机社日来翻身尋

主人樓臺 社日ニハキタルヒルガ

還下度柳穿花去又来

其飛カケルイキヲヒハ雲ヲオカニ雨
ヲクミリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲ

クミリ花ヲクミリテ
行テハカリスルナリ 両翅拂殘

花露水一毛不沾地風

埃 其飛アツバサハ花ノツユヲハラヒ
テ地ヲ吹ク風ハカフムトモヌコシ

鳥衣國裏風光好

養子成時便帶回 鳥衣國
任山國ナリ其國カヨロヒキユニ子ヲ

詩 燕五字對句 口上

風簾雙過影 夢遠鳥衣巷

画棟並棲身 心飛白玉堂

詩 燕七字對句

羽翼不沾寒食雨 經春雨

夢魂應遠落花泥 逐暮雲

燕 肇

燕 肇

燕 肇

燕 肇

燕 肇

燕 肇

取ツキテ一ツノ鳥ニ至リケル
 人來テ王榭ヲ見テ是我王
 人ナリトテ引テ宮室ニイザ
 ナイムスメヲ以テ榭ニムラセ
 ケル然ルニ其人ニナ黒キ物ヲ
 着タリ榭ニムスメニ其故ヲ問
 テ是イカナル國ゾ答テイハ
 ク鳥衣國ナリ其後榭家ニ
 歸リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク
 ニツノ燕サヘツル榭コニオイテ
 カノ止ニル所燕子 **石燕**
 國ナルヲミレリ
 山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛テ
 イケルカゴトシ雨ヤム時ハ还テ
 石ト **生高** 詩經天命玄
 ナル 鳥而生高〇高
 辛氏ノ妃郊禱ニイノリ
 テ燕ノ巢ヲヒロヒ食シテ
 契トイフ子ヲ生リ
 後ニ有商氏トナル

玉京紅縷

宋ノ女妲王京
 が家ニ燕巢ヲ

ツクル其子生育シテトモニ
 去ラントスルトキ王京ガ臂
 ニ集テ別レヲツク玉京紅キ
 糸ヲ燕ノ足ニ付オキタレバ
 明年ニタ其糸ナカラニ來
 レリカクノゴトクスルコト六七

避戊巳日

サクホキヒ
 日ハ泥ヲフク
 マズ廣義見ユ

貞燕

元ノ元貞三年
 湯佐ガ家ニ巢クフ或日

雄猫ニトラレケル雌燕其雛ヲ哺
 翼ナリテ歸ル其後毎年雌燕ヒ
 トリクニ來リテ同巢ニアリケル
 一六年見ル人感号貞燕ト云ケル

妙藥

淋病藥
 燕とこもそ
 ちるよーて食ふべし

鶴の 林浦龍鶴

林浦孤山隠

ニツ鶴ヲヤシナフ 縦セハ飛出テ

籠ノ中ニカヘル 林浦小舟ヲウ

常ナリ若其 留守中ニ客ノ

来ルコトアレハ 林浦カ童子籠

ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラヌ林

浦カアソブ所ニ来ル林浦コ

レヲ見テ 上陽州 小説ニ

家ニカヘル 日人三人

アツニリ各其オモノドコロヲ

イフ一人ノイヘルハ揚嘉ノ

刺吏トチラシム人ノイヘルハ

室多ホシキ一人ノイヘルハ鶴

ニノリテ天ニノホラニトイフ

其カタハラ二人アリテノイハク

我ハ腰ニ十方貫ヲ纏フテ鶴

ニノリテ揚州ニ上ラン

化鶴

神異録曰安宗汝

テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西

南ニク時ニ益州ニ道觀ア

リ道士ドモ一歳ノ間ニハ三

四度来テ遊バリアル時徐

佐郷トイヘルモノ外ヨリ来

テ矢ニアタレリトテ則其矢

ヲ壁ニカケテ後日矢ノ至

来ラバカヘスベシト云テ帰ル

ハタシテ後日明皇蜀ニ幸

ニテカノ道觀ニアソビ其矢

二客来吊

陶侃傳曰侃

ヲヨニテ墓ノ下ニ在リ忽チ

二人ノ客アリテ来吊フ哭セス

テ退ク促コ非常ノ人タルヲニル隨テコレヲ視ニ雙ノ鶴ト成

テ去ル○右詩故事共引鶴ニカキラス鶴ノコトヲ記ルス

鳥之巢△古巢ハ栖

云あまの宿と云独と云五雜と云衆と云衆と云衆と云衆

姐いと云名の巢とはく其巧と人よさたり只一口二兩丸と

以て終末其堅固なる事向小本と板と巢の終に傾こは

哥 うの不動

かひのうらなのかたへはこの子のなかうならひぬる

④名は巢はこて兵様が連二

孕はら雀すずめ雀すずめ又た本はた

巢をひて卵をとけ其卵をたらあり其子のは雀となるに雀となり

哥 新撰六帖

知家

人はうら花のひまのひなれつ

○源氏はふふ

ひらされのうのひひるすめのまといぬきさうはならんと

しることありこのんをありしるまといぬきさうはならんと

④いはのいきうかひまといふたらありしやりしことらん

④一はひるすめのひまのひなれつ

妙藥 痘瘡の薬生花の

扱土多入息とはりやさことあらすて用せるべし

かん産の薬すめの巢とはやきは香白正綱といふ葛は松

十策より内の男が子の小後とあらわかきまて用せるべし

腎茶 崔北羽 氷砂糖 二斤 酒一
升 炭火にてせんしゆぐのむハ骨とます

松茸鳥 着いたくきこふ無たる
春松の葉と食す

哥 夫木 寂蓮

深山の雪より果よりくられ来て
新雪とつくりぬじりやうら

非 松むしる智もちとせう女貞

孕鹿 九の月一子をして一子を
生どろり〇万葉三鹿

の子のひとりと梳河のうめり

非 花つきの潤の後に孕鹿 白羽

鹿角落 角解とていふ〇麻生て
三年して其角自落

非 豆弱のけうらや麻の角 潘山

麻すまふの後の竜思麻の角 来山

妙薬 産後目まの茶 麻の角と
花て灰と産後を利あり

はさかかさの茶 麻の角 柏樹子
と葉ふに移しひねりかけては

妙術 麻の角とあつつかよするら
鯨骨を加えて煮てゆす

蜂 蜂巢 蜜ハ蜜巢の内よ
たたくて冬食す

まよりの出て花の蜜ととり蜜に
醗してゆすこ。蜜ハ蜜巢とす

哥 定家

うきて世とらるるの刺に蜂の
とすまふなれぬいとくあう

非 幼学院 蜂はあやまる 年賀 蜂
蜂の巢や下たかづよまの類 瓢三

素蓋鳥のさくれ蜂の卵が 支考

狂魚つらうめさうも似る蜂の卵と
たすまふふらりとすう 加木

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為

酒花為糧 蜜ハハ人間ノ米ハク
ハス露ヲトツテサ

ケトシ花 作蜜不忙 採花忙
ミツラツクハニカカスラトニミカ

蜜成猶帶百花香 蜜ハスルニハスニ
花ヲトルハイツカシ

サテ蜜トナレテ三百花ノニホヒカアルソ

故 蜜糧 カウセンワカクカク
葛仙翁容ト對食ニ客奇
戯ヲ見上云葛仙翁曰
飯ヲ

吐クミナ蜂トナレ冬シク ハチカヒノオトミ
ニテ又三納ハ飯トナレ 蜂飼大臣

十訓抄京極大政大臣宗輔ハ山 ハチカヒノオトミ
蜂ヲ何九ト名ツケ飼玉ヲ故カク

号 密帝蜂 神瓊禪師蜂窓紙ニ ハチカヒノオトミ
アタリテ出ニトニテ出ルコトアタ

ハサルヲ見テ世界カクノコトクヒ ハチカヒノオトミ
ロシトイトモ出ルアタハスト云

妙藥 蜂ノ巣ト
松ノ葉ト
松ノ葉ト

女作の糸とて一束にきり ハチカヒノオトミ
三升入て二升に用

山蜂の巣とて ハチカヒノオトミ
妙術

ちるに地は竹とて丙丁火と三字と虫 ハチカヒノオトミ
口の中よりイテイ火と念ずること七

はて其土とあり ハチカヒノオトミ
人ト守忠 虫 ハチカヒノオトミ
死て云あま

狂 白くひつた人ごとと同へハハ行目の ハチカヒノオトミ
あつと云て云ひもせぬ 蝶金

蝶 ハチカヒノオトミ
採花使。粉柏。蛭蝶

右は美名のこととぐく品類の類 ハチカヒノオトミ
と云くひの化つたるもの

古 今 ハチカヒノオトミ
おのゑ 遍照

夫木 ハチカヒノオトミ
定家

鳥のまららるる花にねはも鳥らん ハチカヒノオトミ
朝霧の梅の花のこつて

まられり ハチカヒノオトミ
まられり

詞 ハチカヒノオトミ
こひふ。あつらふ。まらふ。初

蝶。花なぬる。花くはらる。花 ハチカヒノオトミ
ての今も。てのいろく

てく人のころ。おねうらむし
。香をぬきむ。嘘をやぶる

連 ころまのよけはるるの蝶宗

俳 夕名み町中に花ふこ蝶うま其角

俳 ころろの表の暇ゆふ蝶うま曾良

俳 遠き山を渡る蝶のたふひ山里

俳 空竹有の裾る相蝶さう川治川

狂 蝶くの神といふとひなうれを
人もかこぬくつらうま津辺 貞柳

詩 胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲 兩翅暈金碧

ニツノ眉ニハ黒キ糸ヲニキタルヤウナ亦
フタツノツハサハいろくノ色ノタケリナア

ルナ 初来花争妍 忽去鬼

無跡 初テキタルトキハ花モソノ色
ヨキヲアラソヒタレドモ去テ

ハ夢ノアトモノコサズカホ
ヨキコトハイダラトナルゾ

香鬢粉翅 暖争飛 品物

タニヤスステモニツクス ヒゲツハサライロ
多情 總属 伊 トリアタカカナ

空ニトビカハス春ノケニキハ何モカモ
ミナコノ蝶ニケニキヲウハワレタリノ
ミヤクハシカフゲツノエラロウタイシユ

上國万家風月夕 樓臺取

次宿花枝 都ナトノ家多キト
コロニトビキタツテ暮

トナレハワカヲモフニニヨロシ
キカタノハナノエダナドニヤトル

詩 蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影 乱隨狂絮舞

ハイクイシエ子ヲカクツ ミセテテ 乱ニ
舞カキリキホカカカカカ

繚繞戀花衢 輕伴落花飛

ハヤクキシニクニツシコフ 軽クラクク上トキニテトフ
ハナトヒトツニトフ

詩 蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞投幽檻 莊叟夢

ハササシライムニチウカニニウカス 荘翁ノ夢
ハサヨハリテラニカニラツル

力困慵飛過短牆 謝公名

チカラキウウタニチシヤウイニル 謝公ノ名
チカラキハリテキニトニル

蝶

巖南異物志 二人

嶺南異物志 二人

海南浮之蝶

蝶 三儿大サ蒲枕 肉ヲカス十

介ヲエタリ是ヲ散ハキメテ肥美

介ヲエタリ是ヲ散ハキメテ肥美

介ヲエタリ是ヲ散ハキメテ肥美

介ヲエタリ是ヲ散ハキメテ肥美

唐中金玉錢

唐穆宗ノトキ
林示中ニ花開キ

ケハアル夜 蛺蝶數万飛來テ
花間ニアツル宮中羅巾ヲ
以テ撲トモ得ラズ帝網ヲ空
中ニハリテ數百ヲエタリ夜
アケテコレヲ見レハ庫中ノ
キニギヨクセニナリ

愛花人

長明発心集ニイ
ハクムカニ佐国

ト云モノ花ヲ愛シテ六十
年遂ニ飽カスイハク我生レ
カハルトモ花ヲ愛スルモノニ
ナラシトノ詩ヲツクリテ死多リ
其後アル人ノユメニ蝶トナリテ
侍ルト見タルヨシカタリケレバ
其子花ヲ心ノヲヨフホドウエ
テ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソ、
ギテ孝養ノ心ニソナヘタリト
ソ孝心ノイタリカニスベキト

莊周夢

蝶タルヤカナラス
分チカタクアラシ

云く是ヲ物化ト云莊周夢ニ胡
蝶トナルサメテ周セシトモ蝶ノ
周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知

蛙

異名 石蟾 丁子蟿
△蟾蜍 形大 色青 蛙ト大ナリ

△蛙子 一名科斗 秋かけてある
もあさそむる時と季とを

夫木

家房

こぼるるまきとよむを地して
堀ののむらまきをたたり

千五百番

家長

まきのふらの山田と来て見れば
鴨のふらごま蛙かぐらり

新六帖

信實

まきの門はれあさむと谷うけの
岩のうけはね蛙かぐらり

家集

兼盛

はあまの蛙の多し老より
あそくやうた人妻の小山田

詞すだく。法多。川池の田。

小田の蛙。あはれ。苗代あり。夕月

お。心次の蛙の多し。あま志し。

蛙もまのそれら。思ふ。あま

かまはま。あま志し。あま

かまはま。あま志し。あま

我おと蛙鳴らん西の田 蓮二

園主も雨にたれて蛙も 草也

角のこ蛙鳴らん其角

狂歌のりて今まひてやよ

よひのりて今まひてやよ

蛙 龍王海ノ辺ニ

蟹 蛙ニアフテ問

テ云 汝カ喜怒何如曰我喜

時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ

テシコレニ次クニ脹脈ヲモツ

テシ脹リスキルニイタリ

テノキヤムナリ

毛弥 日本紀應神紀冬

十月国栖人国津物

ヲ献ス此クス人常ニ山ノ菓ヲ

食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝

食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ

ラシ醋ヲ和テコレヲ食ス唐王晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊

人ノ耳ヲ聒スス珪曰我鼓

吹ヲ所クニホトニドコニ及

バズトイヒケレハ晏慙テ退ク

晏鼓吹ヲコム人ニ○宋書ニ

蝦蟆ノ膾見ヘタリ○漢東方

朔カ傳ニモカハスヲ食フコト

見ヘタリ○淮南子ニ五月十五

日蝦蟆善ヲ作ルトアリ○花

史左編ニ百越ノ人好テ蝦蟆

ヲクラフ筵會アレハコレヲ

寂シヤウ美味トスルナリ

井堤蛙

袋草子日帯カ
葺信始テ能因二

逢ニ時能因今日見泰ノ引
出物ニ見スベキ物アリトテ懐

中ヨリ錦ノ小袋取出是我
重宝長柄橋造ノ時 鈍屑ニ

ト云テケレバ節信大ヒニヨロ
コビ又懐中ヨリ紙ニツクメルモ

ノヲトリ出シテ見セケル能
因トリテ見ルニカレタル蛙ナ

リトテ共ニ感歎シ又
フトコロニシテ歸リケル云

妙術

止蛙鳴 葺の未死
枝の多ふと夏焼はて

鮎子取

東医宝鑑に青魚カ
トコ 葺のハカトコ

蒸鱒

葺技越前より出づ魚
大ニ足平塩ありと遠干テ

法が、出ろ火了あつて合入
非びかきや教ふはまぬれ衣 其角

狂かきといひ是とらこの塩おひ
いふいふれぬ味てまあれ 道鐘

田螺

田贏一名 田青 胡麻と
からしとこむひるり

非引るれ中に交るや田はを連二

妙薬

葺江一法 田螺と
あす物と白粉が加味能

更癩と治る法 田はの白之平と
うとら松のみどりと塩が

はしたると粉とくこととく
松脂を田よりのおあふど加

蜷

異名 河貝子 蝸贏 螺 螺
蜷ハ俗字ニ御産に付る

總角の倍ひたるからのこと
なに肥あ流後の倍ハアキキ

非たふへの葺の葉ふこれ倍三
産後後門破之痛と治す

妙薬

産後後門破之痛と治す
はて付べいあんまの痛と治す

いざ 宿業 三月 宿と二三を解

とて 後塔のままにせし

寄居虫 形骸に似て塔のままに

一名 寄生 搬云 朝 軒 ちらん

だの およ 一二 人のものあり

馬刀 髪 髪 髪 髪 髪 髪 髪 髪

狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂 狂

之 之 之 之 之 之 之 之

非 非 非 非 非 非 非 非

元 元 元 元 元 元 元 元

必用

はるハ二月一ヶ月必用

破軍方向

夜九ツ	巳の方	夜八ツ	午の方	夜七ツ	未の方
申の方	酉の方	申の方	酉の方	戌の方	亥の方
子の方	丑の方	寅の方	卯の方	辰の方	巳の方
午の方	未の方	申の方	酉の方	戌の方	亥の方

時刻

の 日 刻 の 刻

出行作事

西 南 方 へ

壬の 日 を の そ く べー 甲 庚

樂事

見 月 と 芳 菲 の 時 と

拾 ひ ち め れ と 踏 ち ぬ ち ぬ

る ひ ち ら 松 の 二 月 末 は 大 坂

さく茶系極山ふとてはさ
なる酔に乗して暮と惜そめ
おるはたのし死むゆたに
たしまはるる日月人んを

ともよ偏なき楽事
中木のさきこなりとる

天気占候 是月卯の日
三あれの魚よ

素問曰丑に風うらられば
人寒熱多しと入り甲子に

雷あまはバ大熱なり雨雨の
弊なり月ひりるれば災あり

乙未に足むまバ秋米價る
西にんまの蠶糸もに信し災

あつは月まぬ死も早なり月
蝕はまの茶女し災あり

二月用さるる品 左り
あるす

養猫法 養生とはは猫を初
知時拾とやれ食長卵出ると

花壇土 け月花壇土をまじ
製筆 け月より三月十日までにぬめ

制表らるる筆と佳とす毛ハ秋ハ
九月に取る紙赤毛白毛とに

はこす軸竹も同じ其は切ると
利も竹の煎して利もたぐひ入る

毎く酒に硫黄と入もて筆の
毛と紙を舒とて筆の扱は

果多生 梨も榴も李も枝は
るとも其お相後のまは

のさくらとほけ枝の下へた
むやうよとて一葉あせし

雑品 葡萄の根と枝幹を
あげおくべし 檜垣は築く

べし 百葉の樹の下と春
をそのりよりとて草

木の根らさるるに社田を
の柄と根よそくべし 提去

まどと生むとてこま一葉
初年をその柄をかけるは

鱈

こい。かいろうま
りりさけ

こい。糸仰り
うじ。器なけ
り。せうが

白うと。ほくし
美し。ちん

坪
ほろり

せき
こい

指牙

せき
りり

何老製
りり

せき
こい

二汁

せき
りり

小津
りり

煮物
こい

熨襦

白
りり

吸物
りり

煮物
こい

和物

たこ
りり

和物
りり

煮物
こい

精進汁

りり
りり

根いも
りり

煮物
こい

鱈

あけふ
りり

坪
りり

煮物
こい

和味

りり
りり

煮物
こい

煮物
こい

二汁

りり
りり

煮物
こい

煮物
こい

煮物

推茸
りり

煮物
こい

煮物
こい

和物

かん
りり

揚
りり

煮物
こい

時魚

かき。糸。
りり

煮物
こい

煮物
こい

鳥

かも。保成
りり

煮物
こい

煮物
こい

青物

たけのこ。花
りり

煮物
こい

煮物
こい

白

りり
りり

煮物
こい

煮物
こい

梅

梅
りり

煮物
こい

煮物
こい

酒

りり
りり

煮物
こい

煮物
こい

枝

りり
りり

煮物
こい

煮物
こい

煮

りり
りり

煮物
こい

煮物
こい

に搗破いたの上まをこしふるまに
絞く入浴 搗破の入りと搗破に練蓋
して人の通はるふこまをこしふるまに
用ゆる時あはれととこくたて花

鮮く合れば花開て色の時に達
うるはは 練のけんまごのしほし
蕪菜海松貯法 ころとゆと
通しきの

あ一升塩一合あわせ漬る塩
色かつくごしとよくたゆりこ

海藻貯法 と去塩三合合

練粉と塩を長く換は
那る時あはれと水につけ塩とを

本芽作法 毎月晦日に
の目と石菖よ

すれおけバ芽を出さこれを
とりはらひとす毎朝あはれと

ち日よ不ととぶーとや
芽をいごをかり 二月終



